

---

# 世紀末の帝国外伝 砂漠の剣

独楽犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世紀末の帝国外伝 砂漠の剣

### 【Nコード】

N2052Q

### 【作者名】

独楽犬

### 【あらすじ】

1991年1月17日、湾岸戦争が勃発した。多国籍軍は圧倒的な航空戦力で瞬く間に制空権を奪取し、クウェートを占拠するイラク軍に対して空中より打撃を与える。その頃、サウジアラビアでは陸軍部隊が配置についてきた。多国籍軍の空爆下でも依然として強大な戦力を維持するイラク軍の頑固な防御陣地を打ち破るための秘策とは？多国籍軍地上部隊はクウェートを解放することはできるのか？そして開戦より1ヶ月後の2月24日、クウェート奪還の為に地上侵攻作戦“砂漠の剣”が遂に発動された！世紀末の帝國世界に

おける湾岸戦争と、そこで戦う日本軍部隊の活躍を描く！

## プロローグ（前書き）

湾岸戦争より20周年ということので、書いてみました。また連載作品を増やしたと怒られそうですが（苦笑）、そう長くはならないと思います。

## プロローグ

1988年8月、永きに渡るイランとイラクの戦争が終結した。イランの宗教革命への対抗のためにイラクにはアメリカ、ソ連、湾岸諸国から莫大な資金援助が行なわれており、戦争が終わった後には多くの債務が残った。それがイラクの経済に重い負担となり、イラクを統治する独裁者は追い詰められることになる。そして2年の歳月が経った。

1990年8月、世界は混沌としていた。前年のソ連改革派書記長の失脚により世界情勢は不透明になった。デタントの終焉を示すものか、それともソ連の新たな変革を示すものか、世界が判断を下しかねていたのだ。情勢は不安定化し、各国は動きをとりづらくなつたように見えた。それが独裁者に決断を促した。

8月2日、イラク軍の誇る精鋭部隊である共和国防衛隊が突如、隣国クウェートとの国境を越えた。後に言う湾岸危機の始まりである。ただちに国連安全保障理事会が招集され、即日イラクへの批難決議が採択されたが、イラクはこれに動じることなくクウェートを僅か4時間で陥落させた。イラクはさらにサウジアラビアとの国境に戦力を動かした。

8月6日、サウジアラビアは諸外国の救援を要請し、アメリカを中心とする各国がそれを受け入れ史上最大の部隊輸送作戦“砂漠の盾”が発動した。中東の油田にエネルギー資源に依存する大日本帝國も派兵を決定した。

そして1月17日、国際社会の度重なる警告にも関わらずクウェートからの撤退に心しないイラク軍に対して多国籍軍は攻撃を開始した。後に言う湾岸戦争の始まりである。

## 1・配属

1990年10月末 北海道矢臼別練兵場

北海道は日本陸軍が最前線と捉えていた地域で、戦車第一師団をはじめとする精鋭部隊がこの地に配属されていた。デタントを進めた改革派書記長が失脚して再び米ソ対立が深刻する世界情勢を背景に、北海道防衛を任された北部軍の将兵達の緊張は俄然高まっていた。

戦車第一師団に属する戦車第一連隊は4個の戦車中隊と58輦の四四式戦車から成る。四四式戦車は6年前に正式採用されたばかりの最新鋭戦車である。主砲はドイツが開発した強力な120ミリ滑腔砲を備え、装甲には成形炸薬弾の爆発に耐えられる中空装甲を採用し、高出力のディーゼルエンジンによる最大70キロで装甲可能な高機動力を有する。この精鋭戦車が帝國陸軍には1990年8月の時点で450輦程度配備され、現在も調達が続いている。配備先も当然ながら日本の最前線たる北海道に集中している。

その第二中隊は今、小さな丘の影に隠れて“敵”の待つ地域に向けての進撃の準備をしていた。中隊長は戦車から離れて丘の稜線上に伏せて敵情を探っている。双眼鏡を手に行くてに広がる森林を眺めた。

「見つけた。やはり“敵”が待ち伏せしている」

中隊長は隣に伏せている副官に指摘した。

「上手く隠しているつもりだが、よく見れば分かる。さて、問題は  
どう突破するかだね」

2人はすぐに中隊が待機する場所まで向かった。

中隊長は中隊を構成する3個小隊の指揮官を集めて、偵察の結果を報告した。それから自ら考案した作戦を提案してみせた。簡単な

作戦なので打ち合わせがすぐに終わり、小隊長たちは散っていった。

森林に潜むのは“敵”の戦車隊。壕を掘って車体を隠して砲塔のみを晒していた。指揮官は教科書通りに敵が通ることが予想される道の脇に隠れて待ち伏せをした。彼はその教科書は敵も読んでいるということのを忘れるというミスを犯していたが、気づいてはいなかった。

勝負は瞬時に決した。裏からまわりこんできた戦車第一連隊の四式戦車小隊4輜に背後から襲撃されて指揮官は“戦死”し、混乱が生じたところへ反対方向から中隊長の指揮する四四式戦車中隊主力が殴りこんできた。

「それまで！」

審判役の将校が旗を振っている。審判役は相対する2つの戦車部隊 どちらも四四式を装備している の間に入ると、戦車を一輜一輜指さして指示を出した。

「五連隊側、撃破6輜、大破4輜。一連隊側、撃破1輜、大破2輜」  
審判役は一方的に損害を割り振ると、そのまま立ち去った。撃破車はその場に残り、大破車は後方拠点に戻り、残った戦車は次なる戦いに向けて動き出した。

その時、各戦車の無線機から指揮官の声が聞こえてきた。

<全車、訓練中止！訓練中止！ただちに集結せよ！>

練兵場の管理棟の前に演習を中断して戻ってきた2個戦車連隊が集結していた。中隊長以上の士官が召集され、残りの乗員は整備をしつつ時間を潰して演習中断の理由をあれこれ考えた。しかし、それを中東で起きている危機に結びつける者は少なかった。彼らにとって湾岸危機は遠い国の出来事に過ぎなかった。

管理棟に集められた中隊長の中に、さきほど“敵”に強烈な奇襲

攻撃を喰らわせたあの中隊長が居た。

「あの判定は絶対に間違っているよ。四四式の射撃能力なら敵戦車隊にもっと多くの損害を与えている筈だ」

第二中隊長は判定に不服のようであった。現状、演習で実弾を使って撃ちあうわけにもいかないのです、結果は過去の統計的データをもとに審判役の判断で決定され、撃破されたか否かも無作為に割り当てられるシステムになっている。その為に、現場の将兵は演習に現実感をまったく感じられなかった。第2陸軍技術研究所が弾丸の代わりにレーザーを撃つて戦場を再現するシステムを開発しているが、それが彼らの手元に届くのはまだまだ先のことであった。

「仕方ないだろう。使えるデータは過去のものしかないんだから。新兵器の実力を知るには結局は実戦を積むしかないんだ。だろ？成仁？」

愚痴を聞かされている同僚はそう言った成仁なる中隊長を宥めた。「それにだ。宮様軍人なら宮様軍人らしく、もっとどしっとしてないとな。それじゃ閑院宮の名が泣くぜ」

閑院宮成仁。彼は天皇家から分かれた宮家に籍を置く皇族の1人であった。

「しかしだなあ」

まだまだ言い足りなさそうな成仁に対して同僚、津田隆男大尉は話題を変えようと試みた。

「しかし、この召集はなにが理由なんだろうな？」

「思いつくのは湾岸くらいだ」

成仁は今朝の朝刊に“政府、サウジアラビアへの派兵を検討”という記事があったのを思い出した。

「俺たちが中東の砂漠へか？」

「他になにがある？」

成仁の言うとおりでしたが、しかし遠い中東の戦争などまるで現実感のないことであった。

そうこうしている間に中隊長以上の将校の集合場所として指定さ



れた会議室に到着した。普段、会議室に置かれている長机はどこかへ運び出されていて、代わりにパイプ椅子が20脚ほど並んでいた。既に召集対象の将校の半分近くが集まっていた。中には連隊長や連隊参謀の姿が見える。彼らも事情を知らないようであった。

全員が集まって全員が椅子に腰を下ろすと、将官が入ってきた。

将校たちは一斉に起立して敬礼で迎えた。将官は将校たちの前に立つと答礼をして、それから将校たちに座るように促した。それから早速、切り出した。

「諸君らの訓練を中断したのは小官の命によるものである。小官は君らに中央からの命令を伝えてきた。諸君ら戦車第一連隊並びに第五連隊は、戦車第七連隊とともに戦車第一師団から離れて近衛師団に配属される。これは中東事変への介入のための措置である」

将官の言葉に将校たちの間でどよめきが起こった。

「諸君らも知っていると思うが、我が帝國はイラクによるクウエート併合に反対の意思を示し、その侵略行動に対して断固たる対応を執ることを表明した。そのため、先月の空挺部隊派遣に加えて機甲部隊並びに空海軍部隊が増強されることになった。

派遣部隊には近衛師団が指定されたが、イラク軍はソ連製T-72戦車を装備し、近衛師団の主力である三四式では対抗し切れない可能性がある。そこで対戦車火力増強のために近衛師団の三四式戦車装備部隊を全て四四式装備部隊と入れ替える。諸君らはその為選ばれたのである」

それから将官は幾つかの伝達事項を話していたが、その場にいた多くの者にはほとんど聞こえていなかった。実戦になるかもしれない。その事実に対する緊張と不安、そして栄誉への憧れが入り混じった複雑な想いがそれぞれの胸の中に生まれていたのだ。

将官の話が終わり解散となった。しかし成仁だけ居残りが命じられた。そして告げられたのは信じられない言葉であった。

「戦車学校教導隊とはどういうことですか！」

成仁は声を荒げた。彼は千葉にある陸軍戦車兵のメッカ、戦車学

校への転属が命じられたのだ。

「あちらの指示だ」

将官は会議室のドアを指した。そこには少将の階級章をつけた男が立っていた。

「幸村侍従武官殿！」

侍従武官とは大日本帝國軍の最高司令官たる天皇陛下に付き従いて軍事問題について補佐を行なう軍人を言う。

幸村は成仁の前に立つと、生徒を戒める教師のような口調で語り始めた。

「君も分かっているだろう。前の大戦で皇族軍人がどのように処遇されたかを。今次事変においても同様だよ」

宮様軍人は基本的にお飾りの存在であり、前線で戦うことはほとんどない。ただ例外もある。

「しかし、臣民の先頭に立ち規範を示すのが皇室の務めではないのですか？現に曾祖父様は日清、日露と従軍し勲功を上げたではありませんか！」

「それはあくまで過去のことです。もし皇室から戦死者を出せば軍の士気は、世論は、一体どうなるか想像がつくでしょう」

成仁は心中で“陸軍上層部の首が何人が飛ぶことになるでしょうね”と叫んだが、口にはださなかった。

「分かりました。どうしてもとおっしゃるのなら、私にも考えがあります」

## 1・配属（後書き）

三四式戦車は史実の74式に相当する戦車です。ただこちらの世界では、その前に二八式戦車という戦車が存在して、それに油圧サスペンションによる姿勢制御機構や新型の射撃統制装置を搭載して74式相当に改良したものと設定しています。

## 2・中隊

成仁は中隊の待機している場所に戻ると、部下達が戦車の整備をしていた。四四式戦車は乗員が従来の4人から3人に減っているで、その分だけ1人当たりの仕事量が増える。故に整備は中隊の全員が協力して行なわなくてはならない。車長が欠けた中隊長車にいたっては元の乗員だけではどうにもならず、他の戦車から2人の増援を得て整備作業を進めていた。

「調子はどうだ？」

成仁が声をかけると、履帯キャタピラーを覗いていた砲手の大滝弥一郎おたき やいちろう曹長が立ち上がって振り向いた。

「ご帰還おまちしておりました、大尉殿。どんな様子でした」

「俺達はサウジアラビアに行く」

それを聞いてエンジンパネルを覗いていた操縦手の神谷栄治かみや えいじ一等兵が顔を上げた。

「本当ですか？」

「本当だ」

成仁の真剣な言葉に応援として駆けつけた2人の兵士も作業の手を止めた。

「マジすか!」

その兵士の1人が思わず呟いた。

「おい!大尉殿の前だぞ」

大滝が怒鳴ると、その兵士は顔色を変えて頭を下げた。

「申し訳御座いません!大尉殿」

腰を折ったままぶるぶる震えている兵士を前に成仁は苦笑いしながら言った。

「構わんよ。酒巻さかまき二等兵だったね」

ようやく顔をあげた酒巻の顔は赦された安堵から緩んでいた。

「はい。第2小隊の二号車、操縦手であります」

「気をつけるよ。次は無いぞ。作業を続ける」

酒巻はもう一度頭を下げると、整備に戻った。

「いよいよ実戦ですか」

神谷が確かめるように聞くと、成仁は無言で頷いた。

「ところで大尉殿。実戦になるということは…」

大滝は遠慮がちに尋ねた。成仁は彼の言わんとすることがすぐに理解できた。ようするに“実戦になるのなら、宮様軍人は現場部隊から放されるのでは？”と懸念しているのだ。そして、その懸念は現実のものになるうとしていた。

「安心しろ。私はその件について中央まで直訴しに行くつもりだ。

俺はお前達の中隊長だよ」

数時間後、成仁は機上の人になっていた。私服に着替えると釧路空港で日本航空輸送の羽田便に乗り込んだ。羽田空港に到着した成仁はすぐに都内にある閑院宮邸に向かった。待っていたのは家督を亡くした祖父から引き継いだばかりの当主で、現役の陸軍中将である父であった。

「なるほど。それで直訴に来たというわけか？」

父は成仁の説明を聞いて溜息をついた。

「まったく。困った息子だ」

口ではそんなことを言いつつ、父はまんざらでもない表情であった。

「申し訳御座いません。ご迷惑をおかけして」

真剣な表情で言葉を重ねる成仁に父は穏やかな表情で答えた。

「それは構わんさ。問題はお前に覚悟ができてるかどうかだ」

その言葉に成仁は怪訝な表情をした。

「覚悟ですか？勿論、軍人を志した時から命を捨てる覚悟で…」

父は首を横に振った。

「そついう覚悟じゃない。お前は指揮官だ。指揮官は部下を率い、時に死なせることになる。その覚悟はできているのかと聞いている」  
成仁は思わぬ問いに俯いて黙ってしまった。そして暫く考えてから、ようやく口を開いた。

「分かりません。しかし部下のことを言うなら、なおさら引き下がれません」

成仁は顔を上げて、父と向き合った。

「もし部下達を誰かに預けてなにかあれば、一生後悔することになる。共に訓練に励んだ中隊です。最期まで責任を持ちたい」

それを聞いた父は真剣な表情で頷いた。

「そうか。お前がそのつもりなら便宜を図ろう」

## 釧路港

成仁の上京から一週間後、戦車第1連隊第2中隊の戦車は釧路の港へと集結していた。港には陸軍船舶兵団に所属する大型高速貨物船<奉天丸>が入港している。

<奉天丸>はR O・R O船と呼ばれるタイプの貨物船である奉天丸級の第1番艦である。R O・R O船とはロール・オン・ロール・オフの略で、言うならばカーフェリーの貨物バージョンである。従来の貨物船とは異なり、クレーンなどを使わなくても荷物をトラックに載せたままランプにより積み込むことができる。輸送効率が高い上に、大規模な施設の無い港湾でも利用可能なことから近年海運の主演として踊り出たのである。

<奉天丸>は1個戦車連隊を丸ごと搭載可能なうえに、ガスタービン機関を搭載して最大で32ノットの高速航行が可能である。本来は朝鮮で事変が発生した際に内地から部隊を迅速に送り込むために開発された。今回は中東まで戦車第1連隊の戦車を運ぶ任務を帯びる。なお運ぶのは兵器だけで人員は航空機で運ばれることになる。

成仁は積み込み作業を進める船舶兵の中に目的の人物を見つけた。

「上月中尉！」

声をかけると上月なる中尉は成仁の方へと振り向いた。

「大尉殿！お帰りですか！」

上月大樹中尉は中隊副長で、成仁の上京中は隊長代理を務めていて、今も戦車積み込みの作業を監督するために港を訪れていた。上月は上官の帰還を喜んでいたが、やがて上官が浮かない顔をしていることに気づいた。

「どうしたんですか？大尉殿」

「上月、悪い知らせがある」

成仁の言葉に上月は息を呑んだ。大尉殿の直訴は聞き入れられなかったのか？だが成仁は一転して笑顔を浮かべた。

「残念だが君の昇進はお預けだ。しばらくは私が中隊長だからな」

「それじゃあ……」

「一緒に中東に行くぞ」

## 2・中隊（後書き）

日本航空輸送は戦前に実在した航空会社で、史実では戦時中に大日本航空となります。



### 3・出発

釧路港での戦車の積み込みから1週間が経とうとしていた。それまでの間、成仁と中隊の面々は他所の部隊から戦車を借りて訓練に励み、いよいよ戦場へと出発する時が訪れた。

釧路飛行場に集結した戦車第1連隊の面々は軍が日本航空輸送社からチャーターしたジャンボジェットに乗り込んでいた。連隊長の始良彰彦中佐を筆頭とする将校たちはファーストクラスの席が宛がわれて成仁は窓際の席に座り、隣には副隊長の上月が座った。

「大尉殿。陛下に直訴したって本当ですか？」

そう聞かれると成仁は溜息をついた。

「もう噂になっているのか？」

成仁の言葉に上月は頷いた。

「私は“中央”といったら参謀総長あたりだと思ったんですけど、まさかねえ」

「私はそう思っていたよ。だが、結局そういうことになった」

それを聞いた上月はくすくす笑い始めた。

「良かったじゃないですか。陛下の御意志なら誰も逆らえせんよ」

下士官兵はエコノミークラスが宛がわれていた。酒巻はうたた寝をしていた。すると隣の席に座る兵の肘が酒巻に当たった。

「ん？」

目を覚ますと、目の前のテレビ画面で映画が流されていた。摩天楼の中を巨大な自由の女神が闊歩している。

「なんだこりゃ」

それを聞いた隣の兵士が、酒巻が起きたことに気づいた。

「すまん。起こしたか」

「いや。大丈夫です。なんすか？これ」

「これからクライマックスだよ」

出発からほぼ1日の時間を経てカタールのドーハ空港に着陸した。カタールは親米英の国家で、湾岸危機に際しては反イラクの立場を取って多国籍軍の重要な拠点となっていた。

彼らを出迎えたのはまず中東の茹だるような暑さであった。しかし日本と違い湿度は低く直射日光さえ避ければ日本よりすこし易いかもしれないと成仁は思った。そして次に出てきたのは先に派遣された第1挺身団の面々であった。

「お待ちしております」

出迎えたのは稲村という名の中尉であった。稲村は連隊の指揮中枢と中隊長たちを集めてバスに乗せた。

バスが向かったのはカタールのアメリカ軍基地で、その一角に日本陸軍派遣部隊司令部が置かれていた。一行はその中の会議室へと案内され、派遣部隊指揮官である藤川直人中将と近衛師団長の高良一郎中将が彼らを迎えた。2人とも迷彩服姿で、ここが前線であることを示していたが、成仁は2人の着ているのが日本本土での戦いを想定した森林迷彩仕様であることが気になった。一行が敬礼をすると2人は答礼した。

「ようこそ中東へ」

それが藤川中将の第一声であった。

「既に知っていると思うが、イラクがクウェートへと侵攻し、現在は中東地域に同盟各国の部隊が続々と集結している。我々の目下の任務はサウジアラビア防衛である。我が国の消費する石油の多くはサウジアラビアより輸入されており、その防衛は国家の根幹に関わる。その点を肝に銘じ、任務に励むように」

それに続いて高良中将が引き続いて言葉を述べた。

「現在、近衛師団はアメリカ中央軍の指揮下にある。補給及び人事は派遣軍司令部が担うが作戦行動はアメリカの統制下で行なわれる。他国軍の指揮下で戦うことに戸惑いを覚えると思うが、これは我が国一国の問題ではなく世界秩序の問題である。そのことを胸に刻み、国際社会の一員として自覚を持つて欲しい」

2人の中将が話を終えると、近衛師団の幕僚が詳しい説明をはじめた。資料を配り、部屋を暗くして、プロジェクターのスイッチを押した。スクリーンに映されたのはイラクとクウェートの地図で、部隊記号がつけられてイラク軍の配置を示している。

「中東情勢に詳しくない者が多いと思うので、まずイラク軍について述べよう。イラクは中東随一の軍隊を保有し、その陸軍兵力は世界第4位である。59個師団から成り、兵力は95万人に達する。さらに現代では予備役兵を動員し、兵力は拡大しつつある」

幕僚は指示俵でクウェートを示した。

「現代、イラク軍はクウェートに最低でも10個師団以上の兵力を配置し、後方にも同程度の陸軍部隊を待機させている。この配置は偵察情報によりもので精度は高くないが、イラク軍がクウェートに大兵力を配置しているのは間違いない」

スクリーンの映像が変わった。映っているのはソ連製戦車T-72の写真である。

「君たちがもつとも警戒すべき敵はこのT-72である。重量は41t。主砲は125ミリ砲で、徹甲弾、対戦車榴弾に加えて対戦車ミサイルを発射する能力を持つ。また装甲には複合装甲を備えていると思われる」

戦車乗りたちの緊張が高まった。T-72は彼らの装備する四四式戦車を開発する上で仮想敵に挙げられ、それを上回ることを目指したのである。まさに宿敵である。

「T-72を装備しているのはイラク軍の精鋭である共和国防衛隊だ。彼らこそ我が師団にとって最大の脅威である。ただしT-72と交戦した経験を持つイスラエルの報告によると、ソビエトがアラ

ブ諸国に供給しているものは性能を落とすとしたモンキーモデルで、本国仕様に比べて火力、防御力の双方で劣っていると思われる」

スクリーンの映像が再びイラク軍の配置図に戻った。

「共和国防衛隊は現在もクウェート国内に配置されている。現在のところサウジアラビア方面への攻勢を示す予兆は確認されていないが、警戒が必要である」

プロジェクターの電源が切られ、再び部屋の照明が灯った。

「なにか質問はあるかな？」

1人の中隊長が手を挙げた。

「クウェートの奪還作戦は行なわれるのですか？」

「それはなんともいえない。外交交渉の結果次第だろう。実行される場合は事前に国連決議が出る筈だから、突然ということは無い」

別の中隊長が手を挙げた。

「我が方の戦力はどうなっているんだ？」

「多国籍軍の戦力が集結しつつある。地上軍を派遣しているのは列強諸国では我が国とアメリカの他にはイギリスとフランスだ。アメリカ軍は第18空挺軍団の主力がほぼ展開を完了している。2個空挺師団に1個機械化歩兵師団だ。さらにまもなく第1騎兵師団が展開を完了する。アメリカはさらに本国から第3軍団をサウジアラビアに派遣する計画だ。イギリス軍はライン軍団から戦力を抽出して1個機甲師団を編成し、サウジアラビアへの派兵準備を進めている。フランスは第6軽機甲師団を展開済みだ。アラブ諸国軍も集結しつつある」

ライン軍団とはイギリス軍のドイツ駐留部隊のことである。

「指揮系統は一本化されているのですか？」

その質問に幕僚は口籠もった。

「日本軍及びイギリス軍はアメリカ中央軍の指揮下にあるが、フランスは独自の指揮系統の下で動いている。アラブ諸国も宗教上の問題からアメリカ中央軍指揮下で戦うことに難色を示すだろう」

戦争を戦い抜くには指揮系統を一本化して全ての部隊が同じ原則、

目標の下で戦うことが不可欠である。しかし、その軍事の常識は政治、そして文化という壁の前に崩れていた。

「砂漠戦に必要な戦訓、情報は十分に用意されているのか？」

次に質問をしたのは戦車第1連隊指揮官である始良中佐である。

「第二次大戦時におけるイラク戦線の記録は残っているし、陸軍は石油危機以来、中東事変への介入を想定した研究を続けている。しかし如何せん十分とは言えない。不足部分はアメリカ中央軍の指導を受ける」

そして最後に成仁が手を挙げた。

「我が連隊は近衛師団との連携した経験が乏しい。師団他の部隊との訓練は十分に可能なのですか？」

その質問に対して幕僚は自信ありげに答えた。

「その点は大丈夫だ。さつきも述べたようにイラク軍の更なる侵攻がなければ攻勢まで十分な練成期間を得られる見込みだ。既に訓練用の拠点も確保している」

それから成仁は続けて尋ねた。

「それと皆様は森林用迷彩を着ていらっしやるが、砂漠用の野装は用意されているのでしょうか？」

幕僚がまた顔を曇らせた。

「現在調達中だ。いずれ届くと思う」

石油危機以来研究を続けてきたと言っても対ソ戦第一の陸軍部内では中東事変の扱いは低いのが実情で、本気で準備をしていたとは言いがたい。その結果が砂漠で戦う服さえないという現状である。成仁は頭を痛めた。

## 4・嵐の前

1990年11月中旬

成仁たちは砂漠で訓練を続けて、この日本とはまったく異質の環境における戦闘について感触を得つつあった。アメリカやイギリスとの協同訓練を繰り返し、練度はたちまち上昇した。

勿論、砂漠ゆえの問題も発生した。例えば細かい砂が戦車や装甲車の機械部に入り込んで傷つけた。それには本土から特殊フィルターを運んで、ラジエターに装着することで解決した。しかし砂漠用迷彩はなかなか届かなかった。

その間も国際社会はイラクに対してクウェートからの撤退を訴えたが、イラクは国内に勾留された在留外国人 事実上の人質である多国籍軍に対する“人間の盾”であった を解放して国際世論を宥めつつクウェートからの撤退を断固拒否していた。

イラクにとって予想外であったのはソ連にほとんど動きが見られなかったことだ。ソ連にしてみれば今年のクーデター以来国内はゴタゴタしている上に、新米国は勿論のこと反米的傾向の強い中東や第3世界の国々まで反イラクの立場に立った現状で公然とイラク支持ができるほどソ連首脳部は空気が読めないわけではない。クウェート撤退とパレスチナ問題をリンケージしようというイラクの主張に表面上は賛同しつつ、具体的な行動はなにもしなかった。

そして多国籍軍はその間も戦争の準備を着々と進めていた。アメリカ陸軍は本国より第3軍団が到着し始めた。第3軍団は戦略予備部隊であり、また強力な戦車部隊が集中配備されたアメリカ軍最強の機甲軍団である。湾岸危機に際しては、第1騎兵師団、第3戦車師団、第1機械化歩兵師団の3個師団と第3機甲騎兵連隊、軍団砲兵などの諸部隊が派遣された。イギリス陸軍第1機甲師団も到着し、日本の近衛師団とともにこれらの機甲部隊は多国籍陸軍の主力を担ったのである。さらにペルシャ湾や紅海に配置されたアメリカ海軍

空母は3隻から6隻に増強され、日本海軍の空母<大鷲>と戦艦<大和>を中心とする第1艦隊も到着した。イラク包囲網がまさに完成しようとしていた。

しかし、イラクもまたクウェートやその周辺に強大な陸軍部隊を送り込み防備を固めていた。強力なアメリカ軍といえども正面から突破を図れば数万人の戦死者が出ると予想された。

戦争の気配が徐々に近づく中、各国で反戦運動が盛り上がりつつあった。アメリカでは大統領の支持率が最低になり、日本でも軍事介入に対する反対の声が日に日に強まっていた。アメリカでは今でもベトナム戦争の敗北の影響が色濃く、日本においても“あの30年”から大陸からの大撤退までの記憶から海外における軍事介入には消極的な姿勢を人々は示していた。

そんな本土の話はサウジアラビアで訓練を続ける日本軍の兵士にも伝わっていた。

夕方。訓練を終えて砂漠の一角で成仁は戦車の上で座って砲塔にもたれて休息をとっていた。そこへ津田大尉がやってきた。彼は成仁の戦車に飛び乗ると、横に腰掛けた。

「調子はどうだ？」

「ようやく暑さには慣れた」

津田は成仁の答えに同意するように頷いた。

「俺もだ。だが日が沈むと一気に寒くなるのは辛いな」

砂漠は暑いと思われがちだが、それは昼間だけの話である。砂漠の温度を保つ力は低く、日光の無い夜には急速に冷える。

津田は本題を切り出した。

「ところで、もしかしたら本国に帰れるかもしれないぞ」

「じゃあ例の噂は本当か？」

「ああ。現政権の支持率が最低記録をまた更新したよ。臣民は戦争を嫌がっている。野党も強気だ」

成仁は津田の言葉を聞きながら議会で総攻撃を受ける政権与党の姿を容易に思い浮かべることができた。今月はじめにはイラク大統領は日本政府に中曽根元首相のイラク来訪を要請し、手土産としてイラクが勾留していた人質の日本人が釈放された。こうしたイラクの行動によつて多くの日本人はもう日本がイラクと戦う理由はないと考え始めていたのだ。

「右翼も左翼も戦争反対で固まっている。こういう時に限って一致団結するんだよ、あいつらはさ」

左翼は戦争そのものへの反対という立場から、右翼はアメリカのために戦争をすべきではないという反米思想から、湾岸危機への軍事介入に反対していた。四面楚歌の政府の意思は揺らぎつつあった。「だが撤退するわけにはいかない」

成仁の決然とした言葉に津田は無言で頷いた。ここから立ち去るわけにはいかない。政府、軍部の共通の想いであつた。これは単なる他所の国のための戦争ではない。世界秩序の維持という帝國の利益の根幹を守るための戦いであり、大国としての責務を果たすための戦いなのだ。

「なあ。戦争は避けられないと思うか？」

津田の問いに成仁は首を振った。

「分からない。だが避けられないような気がする」

成仁の予感には当つていた。イラクがなんらかの行動をする度に日本のマスコミは“戦争回避”“情勢緩和”などと高らかに叫んでいたが、まったく的外れであつた。イラクは世界世論を宥めようと様々な策を打ち出したが、クウェートからの撤兵は頑として受け入れようとしなかつたのだ。そして国際連合はそれに対する懲罰の用意をしていた。



その日、安全保障理事会では1つの決議が採択されようとしていた。理事国の大使たちが決議案の賛否を投じた。結果は14ヶ国の理事国のうち、12ヶ国が賛成票と投じ、反米的な2ヶ国が反対票を投じた。国連安全保障理事会決議678が採択された瞬間であった。それはイラクが来年の1月15日までに撤退しなければ、クウェートの解放を達成するために加盟国にあらゆる手段を講じることを認める、即ち武力行使を認めるものであった。

遂に国際社会がクウェート奪還に向けて、後に湾岸戦争と呼ばれる戦いに向けて動き出した瞬間であった。

## 5・改良作戦

12月に入ったある日、成仁は中隊副長の上月中尉と共にサウジアラビアの港町ダンマームに向かっていた。今やそこは多国籍軍の補給拠点と化しており、成仁たちはある本国からの荷物を受け取るためにダンマームへと向かっているのだ。

ダンマームには大量のコンテナが並んでいた。案内役のアメリカ軍士官に尋ねると、全て多国籍軍の補給物資であるという。

「いやあ。凄いな。これほど多くの物資が必要なほど大部隊が集結しているのか」

上月が感慨深げに言うと、米軍士官は苦笑して事情を説明した。

「それもあるんですが、実はいろいろと問題が発生しております。彼の言うにはアメリカ軍の膨大な物資は膨大すぎてサウジアラビアの港湾だけでは捌ききれず中東各地の港湾に分散して陸揚げしているのだが、管理が杜撰なためにどこになにかあるか分からず、なかなか物資を前線に送り込むことができず、また到着した部隊に装備を配備することができないのだという。さらにそんな状態で前線の部隊は補給物資を確実に入手するために二重三重に発注をするので、アメリカの兵站組織は飽和状態にあると米軍士官は語る。

「じゃあ、あのコンテナ群は？」

成仁が尋ねると米軍士官は溜息をついて答えた。

「開封して中身を確認する作業を待っている荷物です」

「そりゃ大変そうだね」

成仁も苦笑いしながら答えた。

「しかし、そうなると装備を受け取れない部隊も多いのでしょうか？」

上月が尋ねると米軍士官が頷いた。

「ええ。到着した部隊はここで2、3日待機して装備を受け取って、そのまま前線へと向かう予定だったんですが、既に2週間は待ちぼうけをくらっている奴がいますよ。待機している兵士は増える一方

ですよ」

「それは大変だ。宿泊施設の確保も大変でしょ」

成仁が心配そうに尋ねると、米軍士官は極自然に答えた。

「それは大丈夫です。待機用の兵舎を建てましたので」

それを聞いて日本人2人は固まった。米軍士官はなにことも無かつたように先へと進んで行った。

「今、兵舎を建てたって言いましたよね？至極当然のように」

「本当にアメリカという国はなあ」

ちなみに待機用兵舎で装備を待つ兵士の人数は1月にはピークをむかえ、3万人に達したという。

「ところで、お2人はなにを受け取りに来たんですか？」

今度は米軍士官が尋ねてきた。答えたのは上月だった。

「戦車の装甲板です。日本中から新型装甲を掻き集めて、部隊の戦車の装甲と交換するんですよ」

四四式戦車は各区画が交換の容易なモジュラー構造となっている。開発時点では技術開発が十分に進んでいなかった為、将来の技術進歩を見越して簡単にヴァージョンアップができるようになったのである。装甲もその一例で、当初は最新鋭の複合装甲の開発が進まず、やむなく一世代前の中空装甲を搭載した。しかし、最近になってより高度な防御力を誇る複合装甲の開発に成功し、既に配備済みの戦車の装甲を換装する作業が始まっていた。

湾岸危機に際しては日本各地から戦時の予備として保管されていた装甲板がサウジアラビアに取り寄せられて、派遣された四四式の装甲を全て複合装甲化することを目指している。交換の容易なモジュラー構造である故に可能な荒業である。

それを聞いた米軍士官が言った。

「そうですね。実はうちでも戦車の主砲の換装を進めているんです。アメリカ軍の主力戦車として配備が進められているM1エイブラムスの初期生産型は105ミリ砲を装備していて、後に生産されたA1タイプから四四式と同じ120ミリ砲に換えられている。湾岸

地域に派遣された部隊にはまだ多くの105ミリ砲装備のM1エイブラムス初期型が配備されていた。

「それは大変ですね」

成仁は思わずそう口にした。主砲の換装となると大規模な改修作業が必要になる。その困難さはモジュラー式装甲の交換の比ではない。

「本土に送るんですか？」

だから成仁はこう尋ねるのも当然である。普通の国ならそうなる。だが、アメリカは普通の国ではなかった。

「いいえ。こつちに臨時の工廠を建てました」

その発言に日本人2人はまた固まり、そして米軍士官はなにことも無かったように先へと進んで行った。

「今、工廠を建てたって言いましたよね？至極当然のように」

「本当にアメリカという国はなあ」

アメリカ軍の戦争準備を最終段階に入ろうとしていた。

2人が装甲板の到着を確認すると、日本陸軍が契約したサウジアラビアの運送会社によって運び出され、近衛師団の駐屯地に持ち込まれた。そして整備員たちの手によって次々と装甲板の交換が行なわれた。

空間装甲と複合装甲。どちらも対戦車兵器の発達に対する回答として誕生した装甲である。

空間装甲は成形炸薬弾に対抗すべく装甲を二重にして間に隙間をつくった装甲である。成形炸薬弾は爆発エネルギーで装甲に穴を開ける弾であるが、間に隙間をつくることで爆発エネルギーが拡散して貫通力を弱めることができるのである。しかし、その効果には、特に成形炸薬弾対策の装甲であるので徹甲弾に対して限界がある。

一方、複合装甲は異なる材質の装甲板を組み合わせることで防御力を高めた装甲である。四四式用に開発されたものは鋼鉄板と日本

の得意分野となりつつあるセラミック素材を組み合わせたもので、セラミックはその硬さ故に成形炸薬弾や最新の高速徹甲弾でさえ簡単には貫通を許さないのである。硬いということは脆いことも意味するが、鋼鉄の装甲板と組み合わせることによりそれを補い強靱な防御力を獲得している。各国の最新戦車の標準装備となりつつある最新の装甲なのだ。

「これで遠慮なく戦えますな」

上月が交換作業を眺めながら呟いた。中空装甲を使っていたこれまでは防御力に不安があったが、これで憂い無く戦うことができる。

「ああ。日本の戦車がいかに進歩したか世界に示せるな」

成仁が感慨深く言った。かつて日本の戦車の評価は低かった。技術力や工業力の不足、限られた国力故の航空機への資本集中、そして重量級戦車の運用が厳しい各種インフラの不足。そうした様々な要因が重なって日本の開発した戦車は諸外国に比べて火力、防御力ともに劣っていた。

四四式戦車は日本陸軍が誇る世界水準の戦車である。不謹慎を承知で言えば、この危機はまさに日本の戦車技術の発展を世界に示すチャンスであった。

「問題は我々がどのような戦いをするかだな」

そして、それを決める作戦計画の立案が進められていた。

## 5・改良作戦（後書き）

即席兵舎と即席工廠は実話らしい。本当にアメリカかってチート（笑）

## 6・サムライ旅団

キング・ハリド軍事都市

12月の半ばになった。その日、近衛師団長の高良中將はアメリカ第3軍の指揮官であるジョン・ヨーソック中將の招待を受けていた。現在、近衛師団は第3軍の戦略予備部隊に指定されていた。

高良が呼び出されたのは砂漠の中にある巨大な人工都市、キング・ハリド軍事都市であった。1970年代にアメリカがサウジアラビア防衛のために建設したこの軍事都市は最大6万人以上の人員を収容でき、湾岸危機においても多国籍軍の重要な拠点として機能していた。

「それでご用件は？」

高良中將が尋ねるとヨーソック中將は申し訳無さそうに答えた。

「君のところの1個旅団を転出させてほしい？」

その答えを聞いて高良は顔色が変わった。

「それはどういうことですか？」

近衛師団は3個旅団から成るが、その1個を持っていかれては師団の打撃力は3分の2になるうえに、部隊運用の観点から見ると前線に2個旅団を並列して1個を予備にするのが基本であるから1個旅団の転出は近衛師団から予備兵力が奪われることを意味する。

「第3軍団が現状の戦力では共和国防衛隊の撃破に不十分と主張しているな」

ヨーソック中將の説明によれば第3軍団の増強の為にクウェート正面の海兵遠征軍に配備されたイギリス第1機甲師団を転属させ、その代替戦力として機甲旅団を海兵隊に差し出さなくてはならないのだという。その旅団を第3軍の予備部隊である近衛師団から提供するのだ。

当然ながら高良中將は異議を唱えた。

「だったら我々近衛師団を第3軍団に配属すればいいじゃないです

か？なんで我々は戦力を分割された上に予備でいなきゃならないんですか？」

「君の意見はもつともだ。ブラッドソーも君たちを欲しがっている」  
第3軍団の指揮官であるダニエル・ブラッドソー中將はイギリス師団だけでなく近衛師団も加えて5個師団態勢でイラク軍を粉砕したい考えだったし、アメリカ軍部隊にも近衛師団を戦略予備として使うことに懐疑的な意見もあつた。いざという時の予備には機甲部隊よりも高い機動力を発揮できるヘリコプター部隊の方が良いという意見だ。だがシュワルツコフ中央軍司令官がそれらの主張を退けた。

「なぜですか？我々が信用できないんですか？」

「違うよ。君たちは信用している。信用されていないのはエジプト軍だ」

多国籍軍はアメリカを中心とするアメリカ中央軍とアラブ諸国の連合部隊であるアラブ合同部隊に分けられる。宗教上、政治上の理由により両者の間には直接の指揮系統は存在しない。そしてアラブ合同部隊の主力を担っているのがサウジアラビアとエジプトの軍隊であるがヨーソックの言葉によればシュワルツコフと中央軍はエジプト軍を評価していないのだという。

「それで彼らの進撃が滞った時には君たちに突入してもらおうのさ」

「中將。私はエジプト軍を信頼しています。彼らは幾度の中東戦争においてイスラエルを相手に激戦を繰り返している。我々は日本を代表してここへやってきました。それが不要な心配のために買い殺しにあるのでは堪りません」

「分かっているさ。言っただろう。ブラッドソーは君たちを欲しがっている。主作戦に参加できるように努力はするよ」

だがヨーソック中將は確約をしなかった。

「それでどのような作戦を？」

「海兵遠征軍が南からクウェートへ進み、第3軍団と第18空挺軍団が西から攻撃する。だが西からの攻撃がどのような形になるかは



定まっていない」

このとき、高良はヨーソックの説明について“クウェートを西側から攻撃する”程度と受け取っていた。そして後に決まった作戦の詳細を知らされて驚愕することになる。

高良中將は近衛師団司令部に戻ると、海兵隊に配属する旅団の選定にかかった。熟考の末に高良中將は第1旅団を選んだ。始良中佐の指揮する戦車第1連隊、そして成仁の中隊が配属された旅団である。

彼らが配属されたのはクウェート正面に配置されたアメリカ海兵隊第1海兵遠征軍である。第1海兵師団、第2海兵師団、第4海兵遠征旅団、第13海兵遠征隊、第26海兵遠征隊などの陸上部隊、航空部隊から成る。さらに日本海軍陸戦隊旅団も配属されている。彼らは精強な部隊であり、クウェート奪還という重大な任務を担うには相応しい部隊であった。ある一点を除いて。

一点とは戦車が旧式であることだ。海兵隊の主力戦車は105ミリ主砲と丸い砲塔が特徴的な旧式のM60である。射撃統制装置は近代化が行なわれ、爆発反応装甲が追加されているとはいえ30年前の戦車だ。その点の事情は日本海軍陸戦隊も同様で、主力戦車はM60と同レベルの二八式戦車であった。

相手は中東随一の陸軍国家である。その大軍団が守るクウェート奪還作戦を任せるのにはあまりな状況であった。海兵遠征軍が陸軍の機甲部隊の配置を求めた所以である。

勿論、海兵隊も陸軍の助けを借りている状況に甘んじているわけではない。本国から新たにM1A1戦車を装備したばかりの部隊を送り込んだのである。彼らは近衛旅団とともに第2海兵師団に配置され、クウェート奪還作戦の先鋒を担うことになる。

クウェート・サウジアラビア国境地帯、第1海兵遠征軍戦区

第2海兵師団に配属された近衛第1旅団には戦車第1連隊、戦車第3連隊、近衛歩兵第1連隊第2大隊、近衛歩兵第3連隊第1大隊の4個大隊及び大隊規模部隊を基幹として、さらに近衛砲兵連隊から155ミリ自走榴弾砲大隊1個とMLRS中隊1個が配属されていた。自前の補給部隊も揃えて単独での作戦能力を持つ完全な諸兵科連合旅団である。

最初に海兵隊陣地に到着したのは戦車第1連隊であった。その中に居た成仁が最初に思ったのはクウェートとサウジアラビアの国境線一帯にほとんど兵が配置されていない事実への驚きであった。海兵隊主力は国境から100キロも南に居て、国境地帯は偵察部隊が少数配置されているだけでイラクの精鋭部隊が眼前に居るにもかかわらずまったくの無防備であったのだ。

「これはどうしたことなんですか？」  
成仁が海兵隊士官に尋ねると、彼もその状況に困惑しているようであった。

「兵站部隊の準備が遅れているんだ。国境をこんなに無防備にしたくないのに。これじゃあ、イラク軍の更なる進撃を招きかねない！」  
彼の嘆きは後に現実となる。

ともかく近衛第1旅団は第1海兵遠征軍に配属され、海兵隊員たちからサムライ旅団と呼ばれて頼られることになる。しかし、近衛師団主力は来るべき作戦にいかなる形で参加するかまだ定まっていなかった。そして、また彼らは森林用迷彩を着ていた。

そうこうしているうちに1990年が終わった。

## 6・サムライ旅団（後書き）

ヨーツク氏は実在の人物で史実の湾岸戦争でも第3軍の指揮官でした。ブラッドソー氏は架空の人物で、世紀末の帝國の改訂版第3部その8に登場の国防長官です。

話は変わりますが録画していた『電波女と青春男』と見たら思いっきり名古屋駅が出てきた。やっぱり地元の登場はうれしいですね

## 7・カウントダウン

1991年になっても事態は好転しなかった。イラクは人質を段階的に解放していたが、クウェートからの撤退の気配はまるで無かった。一方、多国籍軍の集結は進められていて、戦争の準備は着々とできていた。しかし、この状況を見ても報道機関、特に日本のそれでは“戦争は起きない”という希望的な観測が流されていた。

その頃には日本軍部隊にも多国籍軍の作戦の詳細が伝えられていたが、近衛師団の取り扱いはまだ定まっていなかった。高良中將も第3軍団の会合に出席して、ブラッドソー中將に陳情したが、なかなか色よい返事はもらえなかった。

一方、成仁たちは海兵隊に割り当てられた施設で実戦に近い訓練を繰り返していた。彼らはそこで再びアメリカの恐ろしさを知ることになる。

「しっかし、こんなもんを造っちまうとは。さすがはアメリカですね」

四四式戦車砲塔の砲手用ハッチから上半身を外に出す大滝曹長が、同じくハッチから上半身を出している成仁に向けて言った。

「まったくだ」

成仁が頷いた。彼らの目の前にはクウェートとの国境にイラク軍が築いた城塞があった。砂を積み上げた防壁に鉄条網、地雷、ガソリンを流した火炎壕。多国籍軍の攻撃から自分達の新たな国土を守るために建造した要塞であった。問題は成仁の居るのが国境地帯から遠く離れた演習場に居るといふ点である。

「丸ごと再現するとは」

成仁は呆気にとられていた。アメリカ軍の工兵隊が、突破の為に作戦を練り、さらに実施部隊に訓練をするために国境のイラク軍が

設けた障害を演習場に再現したのである。

待機する日本軍部隊を前にして突破部隊が演習をしている。先頭をすすむのは地雷除去用ローラーを取り付けたM1A1戦車で、その後ろに地雷爆破用爆弾の射出機を搭載したAAV-7水陸両用装甲車が進む。装甲車から爆弾が発射され、それが戦車を飛び越えて障害の中に落ち、爆発して地雷を吹き飛ばす。その後、ローラーをつけた戦車が前進して残った地雷を処理する。これを繰り返して突破するのである。

米軍の突破部隊が先を進む。次は成仁たちの出番だ。

「先鋒は第2小隊。中隊全車、前進！」

中隊の無線網と繋がったイヤフォンマイクに向けて叫ぶ。それと同時に彼の指揮する戦車隊が一斉に動き出す。

先頭を行くのは第2小隊で、さらにその中で先頭を進むのは二号車だ。小隊長の乗る一号車は二号車の後に続く。

「米軍戦車を同じコースを進むんだ」

車長の命令に酒巻操縦手は緊張していた。狭い戦車の視野では海兵隊が砂の上に残した轍を探すのは難しい作業だ。

「おい。コースを外れているぞ！右だ！もっと右！」

怒鳴り声が車内電話から聞こえてくる。

「申し訳御座いません」

酒巻は必死にハンドルを動かした。小隊の残りの戦車が続く。その後が続くのが成仁ら中隊本部である。中隊長及び中隊副長の戦車2輦と装甲兵車2輦から成る。

「先頭が随分、四苦八苦してるみたいだな」

酒巻の迷走は成仁の目からも明らかであった。

「あとで釘を刺しておかないとな」

訓練が終わると将兵が集まり、訓練結果の再検討が始まった。つまり、それぞれの将兵が適切な判断、行動を行なえたかを確認し、

次に実行すべき教訓を探るのである。

「酒巻操縦手。君は的確な運転ができていなかったように見えるが」  
「厳しい表情の成仁が指摘すると酒巻がうつむいた。」

「その通りであります」

「顔を上げる！原因はなんだ？」

酒巻は成仁と向き合った。

「自分の現代位置を見失いました」

「その通りだ。お前は砂漠の中で、敵の障害の中で自らの位置を見失った。その意味が分かるか？」

成仁は酒巻から目を離し、集まった将兵達を見渡した。そして声を張り上げた。

「ここはあくまでも演習場だ。しかし実際の戦場には地雷があり、敵兵が居る。小さなミスが部隊全体を危険に晒す。お前たちは自分の命だけでなく、部隊全員の命をも背負っているんだ！それを肝に銘じる！」

それから成仁は1人の男に目を向けた。中隊副長の上月である。さきほどの厳しい表情とは違って変わった穏やかな口調で言った。

「明日からの訓練は航法中心でいこう。射撃については文句のつけようがない」

「了解です」

上月は力強く返事をした。

その頃、成仁らサムライ旅団を海兵隊に送り出した近衛師団主力は慌しくなっていた。

近衛師団主力は相変わらず多国籍軍の戦略予備部隊として後方に待機していた。そこへイラク軍が多国籍軍に対して先制攻撃を行い、イラクとサウジアラビアの国境線に沿って設けられた街道の遮断することを目論んでいるという情報が入ったのだ。国境野沿いの街道

は多国籍軍の重要な補給線であり、そこを遮断されれば戦争の勝利はおぼつかない。多国籍軍はただちに国境の部隊増強を命じた。

近衛師団も国境線沿いに進出してイラク軍の攻撃に備えることになった。近衛師団が新たな担当地域となったのはイラクとクウェートの国境線とサウジアラビアとの国境線にぶつかるポイントで、ルーキーポケットのコードネームが与えられていた。

結局、イラク軍の先制攻撃は無かったが、近衛師団は新たな戦地に移動したことにより今次の戦争において決定的な役割を果たすチャンスが与えられることになった。

そして世界は運命の1月17日を迎えた。

## 7・カウントダウン（後書き）

ようやく次回開戦です。ただ私のPCに問題が発生しまして、これに限らず全体的に更新が遅れると思われると思います



## 8・砂漠の嵐

1月17日 サウジアラビア国境線

国連安全保障理事会決議678が採択されてから一カ月半の時間が過ぎた。イラクは勾留した人間の盾を全て解放して国際世論を宥めようとしたが、クウェートから軍を撤退させない限り多国籍軍構成国は武力行使を撤回するつもりはなかった。

期限である1月15日が過ぎた。それから2日経った17日、その日も各国のマスコミ 特に日本のそれは “イラクが人質を解放したことで戦争は回避される” などと無責任な楽観報道をしていた。しかしサウジアラビアの上空では極秘任務を与えられた攻撃ヘリコプターAH-64アパッチの編隊がイラク軍の拠点を目指して飛んでいた。

ノルマンディー任務部隊というコードネームを与えられたこのAH-64編隊の任務は国境線に配置されたイラク軍のレーダー施設を攻撃して、多国籍空軍の攻撃隊が侵入する“道”をつくることであつた。

事前に侵入した特殊部隊員の誘導を受けてアパッチ部隊は迷うことなくレーダー施設の正面へとやってきた。低空ホバリング飛行で砂丘の陰に機体の大部分を隠しつつ接近し、攻撃のタイミングを待った。

「攻撃開始！」

アパッチは一気に上昇し、砂丘から身を晒して搭載しているヘルファイアー誘導ミサイルを発射した。ミサイルはレーダーに吸い込まれるように命中し爆発した。

ノルマンディー任務部隊は見事に任務を達成し、イラク軍の2つのレーダーサイトを破壊した。この攻撃により空軍部隊がイラクのレーダー網に捕らえられることなく侵入できるようになり、実際にノルマンディー任務部隊が帰途についている頃、その上空では百期

以上の航空機と海軍艦艇から発射された無数の巡航ミサイルが北を目指していた。

バクダット イラク空軍防空指揮センター

イラク空軍の司令部では国境のレーダーサイトからの通信が途絶えたことで大混乱に陥っていた。

「司令！これはアメリカの攻撃では？」

「その可能性が高いな」

「では大統領に報告を！」

しかし司令官は参謀の進言を受け入れるべきか躊躇していた。もし誤報であった場合に司令官がどのような咎めを受けることになるかを想像すれば、それは仕方が無いことであつた。ただ結局のところ司令官は大統領に報告を行なうことはなかつた。できなくなつたのである。

突然、天井の上から爆発音が聞こえてきた。

「何だ？」

暫くしてまた爆発音がして、今度は天井が崩れた。司令官も参謀も下敷きになり、イラクの防空組織は事実上消滅した。

上空を防空施設破壊の犯人が飛んでいた。それはアメリカ空軍の攻撃機なのであるが、その機体の写真を見ても見る人によつては空飛ぶ円盤だと思つかもしれない。その機体には曲面がなく平面を幾つも組み合わせる飛行機の形をつくっていた。真つ黒に塗装され、他の多くの軍用機と比べると明らかに異様であつた。

「ダブルタップだ」

真つ暗なコクピットの中で操縦桿を握るパイロットが呟いた。彼の愛機は2本のレーザー誘導爆弾を装備してイラクの防空センター

を襲撃することになっていた。1発目は見事に命中したが、防空センターの頑強な構造を突破できなかった。そこで彼は第2次攻撃を決意して上空を旋回して再アプローチした。彼の目標はただ1つ。第一次攻撃の爆弾が命中して防空センターの天井にできた亀裂である。そこに命中させなければ結果は第一次攻撃と同じになる。そして彼はそれを見事にやり遂げたのである。

任務を終えたパイロットは機体を反転させてサウジアラビアの基地を目指した。最後にミラー越しにバグダットの様子を見ると、さつきまで真っ暗だった空に向けて幾えものオレンジ色の閃光が伸びていた。

「まるで独立記念日の花火だな」

イラク軍防空部隊は敵の姿を捉えられず乱れ撃ちしているようであった。だが捉えられなかったのは彼らが無能であるからではない。なにしろ相手に行っているのはレーダーに捉えられない世界初のステルス機、F-117ナイトホークであるのだから。

開戦初日から多国籍軍、特にアメリカ軍の発揮した打撃力はまさに圧倒的であった。イラク軍の防空網は瞬時に破壊され、イラクとクウェートの上空は多国籍空軍にとっては安全な、逆にイラク空軍にとっては危険な空域となったのである。

いや危険なのは空中だけではない。地上においても多国籍空軍の爆撃対象になるだけであった。イラクは各地に防御用シェルターを設置して航空機を隠したが、レーザー誘導爆弾による精密攻撃を前にしてはまったくの無力であった。

もはや空中での勝利を望めなくなったイラク空軍は作戦機の温存の為に隣国イランに対して航空機を退避させ始めた。しかし、その行為は多国籍空軍に狙いやすい鴨を提供する結果となった。多くのイラク軍機が撃墜され、アメリカ空軍の戦闘機に久々の撃墜マークを提供するだけの結果に終わった。

イラクは苦し紛れにイスラエルやサウジアラビアに向けてスカッド弾道ミサイルを撃ちこんだ。イスラエルを戦争に巻き込み、アラブ合同軍の結束を乱すのを目指したがイスラエルが自制し事なきを得た。

開戦から10日後の1月27日。多国籍軍最高司令官であるシュワルツコフ将軍は記者会見を開き、“絶対航空優勢”を宣言した。

空中における戦闘は終わった。後はクウェートに居座るイラク地上軍を撃破するだけである。だが多国籍軍の圧倒的な空軍力をもつてしてもそれは難しいことであった。空軍部隊の度重なる攻撃によっても撃破されたのはイラク軍の僅か30%に過ぎなかった。いや、それまでの戦争の常識と照らし合わせれば「30%“も”撃破した」と言つべきかもしれない。そのような数字は核兵器を使わないと実現できないと考えられていたのだ。それだけ多国籍軍の航空攻撃は空前の規模であり、圧倒的だったのである。

だがイラク地上軍は残った。後始末をするのは多国籍軍陸上部隊である。

8・砂漠の嵐（後書き）

よつやく開戦です。

## 9・増援部隊

1月27日

シユワルツコフ将軍が“絶対航空優勢”を宣言したその日に日本本土からの増援部隊がサウジアラビアに到着した。増援部隊といつても、そのほとんどが兵站部隊であった。

かつて“兵站軽視”と批判された日本軍であるが、陸軍部隊の兵站部門の小ささは相変わらずであった。ただ、それは所謂“兵站軽視”のためではない。

1962年の大陸大撤退より日本陸軍はその戦略方針を大きく転換し、攻勢重視から守勢重視と変化したのがその最大の理由だ。朝鮮半島や北日本で攻め込んできたソ連軍に対処するのを主眼に軍備を進めるなら兵站部門は最小限に抑えられる。敵地へと攻め込まない以上、兵站戦が大きく伸びることはあまり想定されないし、しかも防衛線なら現地の民間インフラを最大限に利用できるからだ。また部隊が小ぶりな方がいざという時のフットワークが軽く、第二次世界大戦におけるドイツの電撃戦を目撃して以来、電撃的な奇襲攻撃への対処を念頭におく日本陸軍にとっては重要なことであった。

ただ今回のように攻勢作戦に参加する機会がないわけではない。朝鮮で事変が生じた際だって、ソ連や中国の攻撃を防いだら逆に大陸側に攻勢を仕掛けることだってあるだろう。その為には十分な兵站組織が必要である。日本陸軍は予備役を活用することにした。

日本陸軍の制度では2年間の徴兵期間の後、8年間予備役に服することになっている。つまり、現役部隊に対して4倍の予備兵力が存在しているのだ。そうした予備役兵を招集することで戦時に必要に応じて兵站部隊を拡大することができるのだ。

かくして湾岸地域に新たに送り込まれた増援部隊により旅団や師団の兵站組織は大幅に強化されることになった。

サムライ旅団に配属される予定の部隊はサウジアラビアのキプリ

トという街に一度送り込まれて再編制されることになった。そこには海兵隊の兵站拠点がある。成仁は旅団の幹部達とともに増援部隊の様子を視察に行くことになった。

キブリトで待機中の増援部隊の姿に年配の将校は顔を顰めた。下級兵士の多くが一心不乱に携帯ゲームに没頭していたのである。

「これが栄えある皇軍兵士たちの姿か？」

そう呟きながら互いに目配せする高級将校たちだが、同じく視察に同行していた津田の言葉が彼らに冷や水をかけた。

「まあ、娯婦を連れて歩くよりはマシじゃないですか？」

1962年の大陸大撤退以前に活躍していた従軍慰安婦について言っているのだ。それは確かに褒められた制度ではないが、将兵の士気を保ち、規律を守るには必要な措置であった。昔から全て奇麗事で済むことはないのである。

アメリカ軍の兵士達も増援部隊の兵士達と同じように携帯ゲームに没頭しているのを目撃したのが、高級将校たちにとっての慰めとなった。このような姿を晒しているのは日本軍だけではなかったのだ。

海兵隊の士官に聞けば日本のゲームメーカーから寄贈されたものだという。成仁は衛星放送で見た、空軍の正確無比な爆撃を評した揶揄した？ 言葉を思い出した。

「ニンテンドーウォー」とはよく言ったものだ」

またアメリカ軍の高官がゲームに講じる兵士達を見て“ベトナムの時にあれがあれば麻薬が流行ることはなかった”と言っていたのが印象に残った。

成仁は彼らを指揮する将校の1人と話した。彼は甲幹、つまり一般大学出身の予備役士官で、内地の状況を簡単に説明してくれた。相変わらず政府の人気は低いらしい。

通常、戦争で勝利をすると時の政権の人気は高まるものである。多国籍軍が空中戦で大勝利を重ねているのだから、その指導者の1人である総理の支持率も上がりそうなものであるが、実際には低い

ままらしい。なにしろテレビに映る“勝利を重ねる多国籍軍”の姿はアメリカ空軍ばかりで、それを見た視聴者は“アメリカが居てくれれば十分で、別に日本が軍隊を派遣する必要はなかったのではな  
いか？”と考えたらしい。中東の石油に依存する日本の現状を鑑みれば、それは不健全な考え方であるが野党や知識人たちも同様の見解を表明していた。

もともと今の政権の人気は高くない。前政権が“史上最高の好景気”を終わらせた余波で、後を引き継いだ現政権がとぼちちりを受けているのだ。

詳細は省くが、プラザ合意以降の円高不況に対して政府が講じた対策が功を奏して好景気が訪れたが、それが“適正な経済状況”から乖離し始めたところある貴族院の学士院会員議員が主張し、それに賛同した貴族院議員たちの働きかけにより前総理は緊縮財政、増税といった景気引き締め策を敢行した。その結果、過熱化していたインフレが抑えられて、投機により高騰していた株価も安定し、目標を達した。

しかし、その光景は傍目には政府の介入により目の前に迫っていた空前の好景気が破綻したようにしか見えなかった。マスコミは時の総理の行為を非難し、支持率も急速に下がった。

当然ながら支持者からの突き上げをうけた衆議院の主要政党も政府批判を展開する。地方の地主層や経済界を支持基盤とする立憲政友会も都市市民層を支持基盤とする立憲民政党もどちらも総理を“貴族院の操り人形”だと批判し、景気の失速は“デモクラシーを無視した結果”だと断じた。

件の学士会員議員は“今、対策をしなければ、より大規模な経済危機を迎えることになった”と主張したが、ほとんどの者が耳を貸さなかった。彼の主張が正しいのかどうかは分からないが、結果として景気が悪化したのが唯一の事実であった。

衆議院がオール野党状態になり、進退窮まった総理は元号が変わるのを見届けて総辞職した。解散は行われず、前総理と同じ政党に



属する現在の総理が政権を引き継いだ。

景気は相変わらず悪い。新総理は直ちに対策を行ったが、湾岸危機による石油価格高騰が直撃して景気はより悪化した。税収は減少し、赤字国債の発行額が増えた。こうなると日本人の“儉約癖”が目覚める。国の借金 赤字国債のことが増えるのはけしからんと、なぜかあれほど批判していた緊縮財政を求める声がだんだん強くなっていったのだ。

「ここで戦果を残さないと、軍も容赦なく切り込まれるぞ」

ソ連の保守派クーデター、天安門事件以降の中国の強硬化など国防予算を増やす理由はいくらでもあるが、今の内地の空気はそれらを気にするそぶりはまったく無いらしい。

「責任重大だな」

成仁はそうとしか言えなかった。

1月29日

シュワルツコフ將軍の“絶対航空優勢”宣言より2日、空の戦いは相変わらず多国籍軍優勢に進んでいた。多国籍空軍はイラク空軍を叩き、イラク地上軍を叩き、さらにはイラク領空深くに侵入してスカッドの発射基地を攻撃した。もはやイラク軍から攻撃能力は失われたかに見えた。クウェートとサウジアラビアの国境地帯は相変わらず手薄で、少数の装甲車を装備した偵察部隊がいるだけであった。

その日の夕方、偵察部隊の海兵隊員が定時連絡をしていると無線にノイズが入り、やがて交信ができなくなった。海兵隊員は無線の周波数を変えて交信を維持したが、イラク軍が何らかの行動に出たのは明らかであった。

そして日が沈み砂漠が闇夜に包まれた後、偵察隊の保有する対戦車ミサイルTOW搭載の戦車駆逐装甲車LAV-ATの暗視装置が

それを捉えた。

「ファック！イラクの戦車隊だ！」

「攻撃だ！攻撃！」

LAV - ATの後部に備えられた連装ランチャーがせり上がり、砲口をイラク軍戦車隊に向けた。

「発射！」

直ちにTOWミサイルが放たれたが、射手は突然のイラク軍の出現に気が動転していたらしく照準を誤った。一発はイラク軍戦車の手前に落ち、もう一発は前方にいた友軍の装甲車に向かっていった。

「待て！あれは友軍だ！照準外せ！」

だが時既に遅し。TOWミサイルは味方のLAV - ATに吸い込まれていった。

「畜生！」

LAV - ATが燃え上がり、ハッチから火達磨になった兵士が飛び出してきた。逃げ出した兵士はその場に倒れて、すぐに動けなくなった。

「撤退だ！撤退！」

LAV装甲車の一群は次々と後退した。その間、不思議なことにイラク軍は海兵隊に攻撃を加えなかった。暗視装置の能力が劣るイラク軍は状況がよく把握できなかったのだ。

## 10・イラク軍南下

サムライ旅団駐屯地

成仁がその日の日課を終えて眠りに就こうとしていた頃、連隊の当直将校に突然呼び出された。

「緊急事態です」

「何事だ？」

「イラク軍が南下してきました。ただちに司令部に出頭してください」

当直将校に連れられて司令部に行くと、そこには旅団の主要な幹部が集まりつつあった。成仁はその中から連隊長の始良中佐を見つけた。

「どうなっているのですか？」

「詳細は不明だが、キブリト攻略を狙っている可能性がある」

キブリトには海兵隊の兵站基地が置かれていて、多くの物資と非武装の後方支援要員が居る。そしてサムライ旅団の増援要員もだ。

「それは拙いですね」

兵站物資を奪われればサムライ旅団を含めて海兵隊の作戦能力が大きく損なわれる上に、後方支援要員を捕虜にして人間の盾として活用する可能性もある。

「直に出動命令が下るぞ。ほら来た」

始良が目線で示した方に振り向くと、旅団長が姿を現していた。

「諸君、事情は既に知っているとと思うが、イラク軍が侵攻を開始した。海兵師団長より命令が下った。キブリトに前進し防衛せよ！」

指揮官達が一斉に司令部を飛び出し、指揮する部隊に向かった。

国境線の南

国境線を突破したイラク軍部隊は南下を続けた。しかし立ちほだ

かるものがいた。海兵隊の監視チームが要請した航空支援である。海兵隊のA-6攻撃機やF/A-18戦闘爆撃機。それに空軍のA-10攻撃機が加わり南下するイラク軍機甲部隊を徹底して攻撃した。

砂漠を動き回る戦車部隊は航空機にとっては容易い獲物であった。陣地に籠っていたればやり過ぎたかもしれないが、剥き出しの砂漠の上にいる状態では逃れる術はなにもない。イラク軍の戦車や装甲車は次々と撃破されていった。それに海兵隊の対戦車ミサイルチームが加わる。空の援護を欠いたイラク軍にもはや勝ち目は無かった。それでもイラク軍は数度、海兵隊の防衛線の突破を図ったが、その度に撃退された。しかし、彼らの攻勢は決して無駄ではなかった。それによって多国籍軍の関心が海兵隊の防衛担当地区に集中し、海兵隊戦区の東隣にあるアラブ統合軍部隊の戦区の防御が綻びたのであるから。

#### 国境線の南 アラブ東部統合軍部隊防衛地区

多国籍軍にはイラクに反感を持つ多くのアラブ諸国が参加していた。その中にはシリアのように反米の筆頭のような国まで混ざっていたのであるから、湾岸危機が周辺諸国にどれだけの衝撃を与えたのか窺い知れるものである。

こうして結成されたアラブ統合軍は、サウジアラビア軍を中心とする湾岸諸国の各国軍を基幹として海兵隊の東側である沿岸地域に布陣する東部任務部隊と、エジプトやシリアの派遣部隊、それにイラクの攻撃を逃れた亡命クウェート軍が配属され、海兵隊とアメリカ陸軍第7軍団の間を埋める北部任務部隊の2つに分かれた。

イラク軍が現れたのは東部任務部隊が守る戦線で、海兵隊陣地の前で激しい爆撃戦が続けられていた30日未明にサウジアラビア領へと侵入した。東部任務部隊の司令官はただちにアメリカ空軍へと航空支援を要請したが、海兵隊の陣地への攻撃を続けるイラク軍部

隊を撃退することに力を注いでいたアメリカ軍は要請を拒絶した。強力なアメリカ空軍の支援を欠いた状態でイラク軍の有力な機甲部隊と交戦できる戦力を東部任務部隊は前線に持ち合わせていなかった。

侵入したイラク軍部隊はこれといった妨害を受けることなく近くのサウジの街に滑りこんで占領した。その街はイラク軍のミサイル攻撃を警戒して住民がだいぶ前に避難していてゴーストタウンになっていたので、占領は容易なことであった。その街の名をラス・アル・カフジという。

キブリト サムライ旅団陣地

イラクとの戦いが迫っていると考えていた日本軍の将兵達は前線の情報を聞き、白けはじめていた。どうやらイラク軍がキブリトまでやって来ることは無さそうである。日本軍は戦いの機会を掴み損ねたのだ。その事実に加え化学兵器警報が発令されて将兵達は動きにくい特殊防護服の着用を強制されたことで気分をひどく害した。

成仁も防護服を着用して戦車のハッチから上半身を出し、時折爆音が聞こえる戦場の方向を眺めていた。時折、視線の先で閃光が煌めき暗闇の中から地平線を浮かび上がらせるのが見えた。しかし、多くの場合に見えるのは自分の吐く息で防毒面の眼鏡部分に生じる曇りであった。今は夜間で気温がだいぶ下がっているのでマシだが、昼間であれば猛烈な暑さが防護服によって増大されて戦闘どころではないであろう。

そこへ通信が入った。防護服内には通信用のスピーカーマイクが仕込まれていて、成仁はハッチから上半身を出したまま受信することができた。発信者は中隊の中で通信傍受を命じた戦車の車長だった。

<カフジなる街がイラク軍に占領されたみたいですよ>  
「ありがとう。引き続き無線傍受を継続してくれ」

そう返事をする通信を切つて戦車の中に戻りハッチを閉めた。四四式戦車は化学兵器の使用に備えて各種空調装置が充実しているので、車内では防毒面を外すことができる。

防毒面を外すと軍の配布している地図を広げてカフジの位置を確かめた。アラブ統合軍の担当地区であり、こちらにただちに影響が及ぶことはなさそうだった。

ラス・アル・カフジ

東の空が白み始めた頃、イラクの占領したカフジの街に近づく戦車の姿があった。サウジアラビア軍とカタール軍の混成部隊であるアブー・バクル支隊に属するAMX-30戦車である。戦車の1つには東部任務部隊指揮官が乗り込んでいた。彼は前線部隊に同行し、自ら敵の様子を偵察しようというのだ。

司令官は戦車を降りて徒歩での偵察にも参加した。そして街の外縁にイラク軍のT-55戦車の中隊が配置されているのを見つけた。「敵の戦車だ！攻撃しろ！」

AMX-30隊は後続する歩兵部隊の対戦車攻撃チームの援護を受けながらイラク軍に見つからないように攻撃態勢についた。

「攻撃開始！」

AMX-30隊は二方向から襲撃を仕掛けた。奇襲効果は抜群で、2輦のT-55が吹き飛ばされると、残りの戦車は市内に逃げた。残ったのは戦車の残骸と逃げ遅れた12名の兵士だった。

「イラク軍、恐るるに足らずだ」

歓声に沸く友軍兵士に向かって司令官は宣言した。勿論、有能な将校である彼はイラク軍の甘く見ているわけではなかったが、兵士に自信を持たせる為にそうした言葉は必要だった。この勝利は今後の戦争を戦う上で大きな力になるだろう。それに、もしかしたら手持ちの兵力だけでカフジを奪還できるかもしれない。

しかし、その司令官の考えはサウジ軍兵士の怒鳴り声が聞こえたことで打ち砕かされた。その兵士はイラク軍の捕虜に尋問をしていた。

「それは本当なのか！」

サウジの兵士が尋ねると捕虜は頷いた。

「どうしたんだ？」

司令官が尋ねると兵士が振り向いて答えた。彼の顔色は悪かった。

「カフジには2個大隊が居るそうです」

“手持ちの兵力では奪還は無理だな”司令官は思った。しかし、カフジには実際には3個大隊編製の1個旅団が存在した。

## 10・イラク軍南下（後書き）

“湾岸戦争大戦車戦”なる本が発売されました。欲しいのですが、上下巻あわせて5000円ですからねえ…



## 11・カフジの戦い（前書き）

と、言ってもカフジの戦いはほとんど描かれませんが…

## 11・カフジの戦い

カフジ外縁

30日夕方、サウジ軍の装甲車部隊が縦隊となってカフジに向かって行った。アメリカ製の四輪装甲車コマンドウの一個中隊で、これが奪還部隊の第一陣である。

しかし装甲車部隊が街の外縁に迫ると同時に、街を占領するイラク軍部隊が一斉に射撃を始めた。重装備とはいいがたいコマンドウは装輪部分に集中射撃を受けて、多くが擱座した。

「なんて様だ！」

街道で立ち往生し装甲車部隊は混乱の中にあった。

「戦車隊！援護射撃だ！」

増援として派遣されたM60戦車がイラク軍部隊に向けて射撃すると、イラク軍の攻撃が弱まり、その隙を突いて生き延びた装甲車が後退してゆく。

かくして多国籍軍の最初の反撃は頓挫した。

サウジアラビア・クウェート国境線近く サムライ旅団陣地

西に日が沈もうとしていた。

キブリトの危機は回避されたと考えた海兵師団司令部はサムライ旅団を国境線近くまで前進させた。戦車第一連隊は旅団偵察隊のすぐ後ろに配置され、イラク軍増援部隊の越境を警戒していた。今のところは静かだった。

そこへ南の連隊本部方面から一台のランクルがやってきた。車上には成仁の姿があり、中隊副長の上月が戦車を降りて出迎えた。

「それで本部の方はどうでしたか？良い知らせは？」

上月が尋ねると成仁は首を振った。

「状況に変化なし。サウジ国王が随分怒っているらしい」

この時、ファハド国王はカフジをアメリカ軍の爆撃で完全に更地にすることを主張していたとも言われている。

「それで真夜中に早速、次の奪還作戦を実行するつもりだ」

「ご苦労なこつて」

「国境線の向こうも騒がしくなってる。イラク軍は増援をカフジに送るつもりだ」

「全力で阻止します」

「その調子だ」

2人はそれぞれの戦車に戻って行った。

夜も更けた頃だった。カフジではサウジ軍による奪還作戦が始まったらしく無線機は激しい戦いの様子を傍受していた。成仁がそれに聞き入っていると、連隊本部から通信が入った。

<前哨陣地が敵の戦車部隊を捉えた。確認次第、攻撃せよ>

「了解」

成仁はただちに中隊の全車に“敵接近”の報を伝え、それらしき物を捉え次第、指揮官である成仁に報告して指示を待つように命じた。すぐに報告がきた。

<ヒナギク6-0、こちらヒナギク1-3。イラク軍の戦車と思われる車列を確認。輪郭がぼやけていて詳細は不明>

第1小隊の三号車から報告だ。詳細不明なのは残念だが、今の暗視装置の性能ではどうしてもぼやけた映像になってしまっから致し方ない。

敵車列発見の報告は各車から続々と入ってきた。その度に敵の詳細が次第に明らかになる。目標は全部で11輦の戦車縦隊で、戦車はT-55だと思われる。そして車内通信網を通じて砲手の大滝曹長からも報告が入った。

<車長。本車の暗視装置も目標を捉えました>

目標はおそらくイラク軍だ。友軍戦車が近くにいるという報告もないから、ほぼ間違いないだろう。だが、もしかしたら実は味方の戦車かもしれない、という考えが成仁の頭の中に過ぎった。報告は全て“おそらくT-55だろう”というものばかりで、“T-55であることは確実である”というものは一度も無いのだ。

だが怖気づいているわけにはいかない。敵らしきものが接近しているのだから決断を下さなくてはならない。もし間違いがあれば、その責任は成仁が負うことになる。その為に彼は各自の判断で発砲することを禁じて、発見しても彼の指示を待つように命じたのだ。

「目標を撃破する。前3輦は第2小隊、真ん中4輦は第1小隊、後方4輦は第3小隊が担当。目標の割り振りは小隊長判断に任せる。攻撃のタイミングは自分が指示する」

<こちらヒナギク2-2、了解であります>

車内通信網を通じて酒巻二等兵は車長と小隊長の会話を聞いていた。彼の乗る第2小隊二号車にも目標が割り当てられた。陣地からの射撃なので操縦手である酒巻には今のところ出番はない。しかし、何時動かす必要が生じるか分からないので、いつでも動かせるように構えておく。不測の事態というのはいつでも起りえるものである。彼はハッチから頭を出して敵が接近する方角に目を凝らしていたが、その姿は確認できなかった。操縦席に潜りハッチを閉めると、操縦手用の暗視装置を起動させた。砲塔の射撃統制装置と連動したパッシブ式赤外線暗視装置は高性能であり十分な視界を得ているのであろうが、操縦手用のそれは微光増量式の簡易的なもので視界はあまり鮮明ではなかった。しかし敵らしい戦車の影はなんとか捉えることが出来た。

<装填、徹甲弾！>

<照準よし>

準備が確実に整えられていく。そして無線から中隊長の号令が聞

こえた。

< 撃ち方用意！撃て！>

次の瞬間、酒巻の視界は主砲発射の閃光により一瞬真っ白になった。用を成さなくなった暗視装置を外して外を眺めると、真っ暗な暗黒の海の中に島のように燃え上がる戦車の残骸がポツリと浮かんでいた。

< 第二小隊、前進して目標を確認せよ >

成仁の命令を聞くと、酒巻は暗視装置を再び装着した。視界は回復していたが、炎上している戦車の周りは明るすぎるようで、真っ白になっている。すぐに車長から命令があった。

< 小隊長車に続け。目標を確かめろ >

小隊長の乗る一号車が動き出し、酒巻も自車を動かしてその後ろに続いた。4輦の四四式戦車は一列に並ぶと、速度を上げて炎上する戦車の群れに向かった。各戦車は砲塔をそれぞれ違う方向に向け、新たな敵の出現に備え警戒をしている。

燃える敵戦車のすぐ近くまで来ると、小隊長は小隊を二つに分けた。小隊長車と酒巻が乗る二号車は敵戦車の縦隊の右側、三号車と四号車は左側に分かれて、敵を挟み込むように停車した。4輦の戦車が周囲を警戒する中、小隊長と再先任の下士官、四号車の車長が戦車を降りて撃破された敵戦車を検分する。

成仁は確認に向かった第2小隊が元の陣地に戻るのを見てようやく安堵した。小隊長の報告によれば撃破された戦車は間違いなくイラク軍のT-55で、生存者は居ないと言う。

すると地平線の向こうから爆音が轟き、いくつも閃光が確認された。増援のイラク軍部隊がアメリカ軍の爆撃を受けているらしい。地平線の向こうで瞬く雷のような閃光を見つめながら、成仁はあれが自分達に向けられたものでないことを感謝した。あの下ではどんな惨状が繰り広げられているのだろうか。

この夜、日本陸軍は湾岸戦争における最初の戦果をあげた。そして、この夜はさらなる敵が日本軍部隊の前に現れることはなかった。しかしカフジではイラク軍が激しく抵抗し、アラブ合同軍の攻撃を跳ね返していた。そして夜が明けた。

## 12・カフジ奪還

### 国境線上空

1機の大型機が上空を旋回していた。その外見はアメリカ製の傑作輸送機C-130は「キユリーズ」のように見えたが、機体の胴体から輸送機に似合わない砲身がいくつも飛び出していた。20ミリバルカン砲2門に40ミリ機関砲2門、そして本来は航空機に搭載されるべき装備ではない105ミリ榴弾砲。アメリカ空軍特殊部隊の誇る攻撃機AC-130Hスペクターはまさに空飛ぶ要塞だった。

朝日を浴びながらAC-130Hスペクター、「スプリット03」はカフジへの増援部隊を支援しているイラク軍のロケット砲部隊に攻撃を加えていた。AC-130の強烈な火力の前にイラク軍の装備はことごとく破壊され、地上の兵士は地獄絵図の中にあつた。

だが機体を隠す闇夜が朝日によって奪われたことでAC-130もまた絶対的な優位を失っていた。

<スプリット03、こちらイーグルアイ301。もうタイムアウトだ！退避しろ！>

上空のE-3センチリーAWACS早期警戒管制機も警告を送るが、AC-130のクルーは立ち去るつもりはなかった。

「イーグルアイ301、こちらスプリット03。もう少して奴らを全滅させられるんだ！奴らを全滅させたら退避する！」

SA-7携帯対空ミサイルを背中にもせて運ぶイラク軍兵士の一団が空を見上げていた。何人かの兵士がミサイルの発射筒を構えて、赤外線シーカーを空中のAC-130に向けた。レーダーを持たない彼らは目標を攻撃するのに目視で目標を捉えてミサイルの赤外線シーカーを向けなくてはいけない。闇夜に阻まれてそれができなかつたが、朝日がそれを可能にした。シーカーが目標を捉え、電子音

がそれを知らせる。

数発のミサイルが空中に放たれ、上空で旋回しながらロケット砲部隊を攻撃するAC-130に向かって飛んで行った。目指すのは巨大な熱源、AC-130を空中に持ち上げている4つのターボプロップエンジンである。1発のミサイルが1基のエンジンに突っ込み、次の瞬間にエンジンは粉々に吹き飛んだ。

突然の衝撃にAC-130はバランスを失い、そのまま態勢を整える暇もなくペルシャ湾の海面に激突した。主翼が折れ曲がり、機体はバラバラになって破片が海面に浮いている。乗員に生存者はいなかった。

サムライ旅団陣地前

イラク軍がカフジに増援を送るべく再び越境してきた。サムライ旅団も陣地より出て攻めてくるイラク軍に対して積極的に戦闘を挑んでいた。砂地を四四式戦車の群れが進み、反対方向からT-55を装備するイラク軍戦車隊が攻めてくる。

成仁は各小隊に担当の区域を割り振って指揮を小隊長達に任せ、副中隊長車とともに戦線の最右翼について中隊主力の射撃から逃れた戦車の処理に注力することにして、前進しながら目標を探していた。

「見つけたぞ！2時方向にT-55！」

潜望鏡に似た仕組みのキューポラを通じて新たな目標を見つけた成仁はそれをすぐに砲手に伝えた。ベテラン砲手の大滝曹長はすぐに砲塔を旋回させて目標を探した。

「捉えた！距離2500！」

「砲手、射撃用意！弾種、徹甲弾！操縦手、そのまま前進！」

「装填！」

大滝の掛け声とともに砲塔後部の弾薬庫から120ミリAPFS



D S弾が自動的に押し出されて、主砲に装填される。四四式戦車の最大の特徴である自動装填装置である。この装置のおかげで走行中でも安全に素早く砲弾を装填することが可能になった。

しかし、現在のFCS、つまりレーザー測距装置とアナログコンピュータの組み合わせでは移動中の目標に走行しながら砲弾を命中させることは難しく、砲手の腕次第だ。現在、本国で開発が進められる新型砲塔ではFCSがデジタル化されて命中精度は大きく向上し、自動追尾機能などの新機能も盛り込まれると言われているが、それはまだ先の話である。今は大滝の腕に頼るしかない。

幸い大滝は熟練の砲手だった。一度の測距、それに勘と経験をもとに相手戦車の未来位置を素早く頭で計算して割り出し、そこに主砲を向けた。

「照準よし！」

「射撃！」

「<sup>撃て</sup>てっえー！」

敵のT-55は成仁車が放った主砲弾の着弾位置に居た。見事に命中である。

「敵戦車一輛撃破！」

成仁はそう宣言すると次の目標を探した。しかし、既に敵の姿は無かった。敵は撤退していた。成仁は中隊無線網の通話スイッチを押した。

「ヒナギク6-0から各小隊長車へ、状況を報告せよ」

<ヒナギク6-0、こちらヒナギク1-1。敵戦車5輛撃破>

<ヒナギク6-0、こちらヒナギク2-1。敵戦車3輛、敵装甲車

4輛撃破>

<ヒナギク6-0、こちらヒナギク3-1。敵戦車4輛、装甲車1

輛撃破。敵部隊が後退するのを確認>

<ヒナギク6-0、こちらヒナギク6-1。敵戦車1輛撃破。中隊

長はどうです？>

最後の通信は中隊副長の上月中尉だ。

「ヒナギク6-1、こちらヒナギク6-0。敵戦車1輛撃破だ。お前達、よくやったぞ」

通信相手に上月を指名はしているが、中隊の全車が聞いているはずだ。戦車14輛に装甲車5輛。中隊はほぼ同規模の敵を撃破したことになる。

「全車へ。一旦、陣地に戻れ」

成仁は命令を出した後、ハッチを開けて砲塔から顔を出した。操縦手の神谷一等兵が既に成仁車を陣地に向けて動かしていた。成仁はカフジの街の方を見つめた。

「どうなってるんだろうなあ」

カフジ

太陽が一番高く上った頃、カフジの街中の道で装甲車が炎上していた。サウジ軍第7機械化大隊のV-150装甲車だ。朝日が昇ると同時に始まった奪還作戦は失敗に終わった。

しかし、多国籍軍側にも手ごたえがあった。友軍と孤立しているイラク軍の戦力は確実に落ちていた。

「次で落とすぞ」

東部統合軍司令官は決意を固めていた。

「第7機械化大隊を第8機械化大隊と後退させる！再び総攻撃を仕掛ける！」

午後一時過ぎ、攻撃が再会された。V-150装甲車とM60戦車がかフジの街に突入していく。

しばらく進むと前方にイラク軍のT-55戦車が現れた。サウジ軍を発見したイラク戦車はすぐに主砲を発砲し、先頭を進んでいたV-150が吹き飛んだ。それと同時に道の両側の建物から銃撃が

サウジ軍に叩きつけられる。

勿論、サウジ軍も黙ってはいない。M60戦車がT-55に撃ち返し、対戦車ミサイルがイラク軍の陣地に向けられる。

激しく撃ち合う両者であったが、次第にイラク軍の方は息切れをするようになった。イラク軍はサウジ軍から逃れようと後退し、その後をサウジ軍が追撃する。後には死体と燃える装甲車輛だけが残されていた。

夕方に近づくにつれて、サウジ軍は解放地区を次第に広げていった。そして日が沈んだ頃、多国籍軍はカフジの解放を宣言した。一方、イラクは自軍の勝利を主張したが、勝敗は誰の目にも明らかだった。

かくして今次の戦争におけるイラク軍の最後の攻勢が終わった。

## 12・カフジ奪還（後書き）

次回より“砂漠の剣”作戦に向けて動き出します

### 13・陽動作戦

2月5日 早朝

イラク、クウェート、サウジアラビアの国境線交差点“ルーキー・ポケット”

砂漠に戦列を敷く戦車と装甲車の背後に不思議なトラックが停まっていた。荷台には空中に向けて突き出したレールのようなものが載せられており、その上に飛行機のようなものが搭載されていた。

翼はまっすぐと伸びた長方形で、機体の後部には尾翼を支えるブームに挟まれる形で小さなプロペラがつけられている。さらに機体の下部にはカメラのレンズらしきものが取り付けられており、おまけにこの機体にはコクピットが見当たらなかった。

「しっかし正式採用されてから、こんなにすぐ出番とはな・・・」  
荷台に乗って飛行機を調整していた軍人が呟いた。この機体は昨年、導入されたばかりであった。

「よし出撃だ」

軍人が荷台を飛び降りると、プロペラが回り始めた。軍人は運転席に戻り、荷台のレールのようなもの、実はカタパルトの操作台に手を伸ばした。

「準備良し。てっえ！」

次の瞬間、レールの上から飛行機が射出され、空中に舞い上がった。そして飛行機は上昇して南へ、国境線の向こうイラクへと向かって飛んでいった。それが大日本帝國陸軍の導入した無人偵察機RQ-2パイオニアの最初の任務だった。

近衛砲兵連隊司令部 射撃指揮所

パイオニア無人偵察機の捉えたビデオ映像がプロジェクターで映

し出される。司令部の分析班がその映像を食い入るように見つめ目標を探している。そして何か目標が発見される度に、指揮所の真ん中に置かれた大机の上に広げられた地図の上に書き足されていく。

連隊司令部の参謀達はその地図を見ながら、指揮下の部隊にどう目標を割り振るか相談をしていた。この司令部は3個大隊の155ミリ自走砲54門 本来は4個大隊編制だが、1個大隊をサムライ旅団に配属している、1個大隊の36連装130ミリロケット砲24輛、そして1個大隊のMLRS18輛を指揮する権限を持っていて、必要なら全ての火砲を同じ目標に向けることもできるのだ。

この度、彼らが狙う目標はイラク軍の火砲や監視施設が主な目標で、激しい攻撃でイラク軍に多国籍軍の攻撃がここから行われると勘違いをさせるのが目的である。軍人達はここではないとここで行われる攻撃に参加したかったが、それが適うかは未定である。

目標を選定し、攻撃の割り当てを伝達すると連隊長が無線のマイクに向かって叫んだ。

「撃ち方はじめ！」

多数の火砲群が一斉に砲撃を開始した。

“ルーキー・ポケット”

国境線をイラク側に進んだところに、幾つも見張り台が建てられている。原始的だが、制空権を失い偵察飛行が行えず、また一帯を見渡せるような丘がない砂漠の中では最も確実な情報収集手段だ。多国籍軍側もわざわざ見張り台に見られる場所で目立つ行動はしないが、国境線のすぐ近くでの行動を制限できた時点でそれなりの意味はある。そして多国籍軍は攻撃に備えて鬱陶しい見張り台の排除に乗り出した・・・イラク軍にはそう思わせたかった。

見張り台1つに最低でも2つの中隊の砲が攻撃を加えた。12門以上の155ミリ榴弾が帝國陸軍のお家芸である同時着弾で見張り

台に命中したのである。数度の斉射を経て見張り団は粉々に砕け散った。

一方、ロケット砲隊はイラク軍の砲兵陣地に襲い掛かった。イラク軍の火砲は大半が牽引砲で、日本軍の攻撃から逃げる機動力も、爆発から兵士を守る防御力も持ち合わせていなかった。

数時間に渡る砲撃で目標となったイラク軍の施設は完全に粉碎された。こうした攻撃は地上戦が始まるまえの20日間の間、続くことになる。

ペルシャ湾 戦艦<大和>

中東に派遣された海軍部隊も陸軍と同様にアメリカ海軍の指揮下に入り、アメリカ中央軍の海上部隊である中央海軍の一員として行動していた。

日本海軍がペルシャ湾に派遣したのは空母<大鷲>と戦艦<大和>を中心とする艦船30隻ほどの艦隊であり、小国の海軍相手なら単独で戦えるだけの戦力を持っているがペルシャ湾には既に撃破すべき敵艦隊は存在していなかった。当然ながら主な攻撃目標は陸上の部隊、施設となった。

こちらでもパイオニア無人偵察機が活用された。上空からイラク軍の陣地を見つけると、そこに<大和>の46センチ主砲が撃ち込まれる。精密な照準で、ほぼ百発百中の命中率で陣地に砲弾が吸い込まれる。世界最強を誇る46センチ砲の前には急造陣地はまったく無意味だった。後には立ち上る噴煙が残るばかりである。

<大和>はアメリカ海軍の戦艦<ミズーリ>、<ウイスコンシン>とともに、その巨砲をもってイラク軍の海岸陣地を1つ1つ潰してまわっていたのである。こうした攻撃は海兵隊 日本から派遣された海軍陸戦隊 が“海上からクウェートに上陸して奪還する作戦の為の下準備”として行われた。

「待機中の陸戦隊の連中が不憫でならんな」

<大和>の艦橋からイラク軍の陣地が粉碎される様を双眼鏡で眺める艦長が呟いた。

陸軍と共に派遣された海軍陸戦隊は現在、洋上の揚陸艦に乗って、上陸作戦に備えて待機している。しかし、彼らがイラクに上陸することははない。実のところ、クウェートへの上陸作戦というのはイラク軍を海岸陣地に張りつかせる為の壮大なブラフなのだ。

多国籍軍がペルシャ湾で上陸作戦を行う風に見せておけば、イラク軍はそれに備えて戦力を沿岸に配置しなくてはならない。その分だけ陸軍部隊の作戦が楽になるというわけだ。

46センチ砲の攻撃により、また1つのイラク軍陣地が吹き飛ばされた。それによって何人かのイラク兵が消滅した筈だ。そして、<大和>に乗る水兵たちは歓声をあげる。

「なんと残酷な茶番だ」

ここで大規模な上陸作戦も熾烈な戦闘も起きる筈なのに、その為の為に戦いが続き、人が死んでいくのだ。



## 14・攻勢の前に

2月9日 サウジアラビア演習場

カフジの戦いから1週間以上が経った。初めての戦い、初めての勝利を経験してサムライ旅団の将兵達の士気も大いにながっていった。そして将兵達は新たな作戦が近づいていることを肌で感じ始めている。このところアメリカ海兵隊との共同演習が増え、訓練も実戦的なものが繰り返されていた。そして指揮官達がよく召集され、アメリカ軍とともに会議を幾度も開いていた。クウェート奪還作戦が発動される日は近い。誰も口にはしなかったが、それを感じ喜んでいった。自分の腕を試す機会が再びくると考えたからだ。

そして、もう1つ将兵達を喜ばせることがあった。遅れていた砂漠用の迷彩服がようやく到着したのだ。これで外では目立って仕方が無い森林用迷彩服とはおさらばできる。

こうした事情もあって将兵達は訓練に真剣に熱意を持って望み、元々高かった錬度は最高水準に達していた。

今日は再びイラク軍の塹壕陣地を突破する訓練を行っていた。成仁は自車の車長用キューポラから上半身を出し、陣地の模型の中を進む1輦の戦車の動きを見守っていた。かつての訓練で位置を見失い安全地帯を外れてしまった酒巻二等兵の操縦する戦車だ。

「頑張っているみたいですね。だいぶ良くなっているじゃないですか」

砲手用ハッチから成仁と同じく上半身を出している大滝曹長が酒巻車の動きをそう評した。今回、彼の戦車は方向を見失うことなく安全地帯を順調に進んでいる。なんの躊躇いも迷いも見られない。

「私の見立てでは中隊の技量は最高度まで上がっているように思います」

大滝曹長が自分の部下達をここまで高く評価することは滅多に無いが、成仁もそれに賛同していた。

「これ以上、訓練を繰り返すとかえって技量が落ちますよ」  
右腕である砲手の指摘に成仁は頷いた。

「作戦も近いことだし、休暇を与えるか」

今度は成仁の提案に大滝が頷いた。幸い暫くはアメリカとの共同訓練はない。

訓練が終わり将兵が集まると、成仁は中隊全員に3日間の休暇が与えることを発表した。全員が大喜びだ。女も酒もご法度で、暇をもてあました兵士がやれることが少ない国ではあるが、それでも休暇はうれしかった。それから中隊を解散させた。

解散した将兵の中から成仁は1人の若者を呼び止めた。酒巻二等兵だ。

「かなり上達したな。見違えたぞ」

上官、それも宮様軍人に褒められて嬉しくない筈が無い。

「ありがとうございます」

頬を赤く染めて頭を下げる酒巻二等兵に、成仁の表情も自然と緩んだ。部下の成長は指揮官にとっても嬉しいことだ。

だが、酒巻が頭を上げて言った言葉が成仁の顔をまた厳しくさせた。

「攻勢が近いんですよね」

「だろうな」

成仁は自分より10歳以上も若い二等兵の顔を見つめた。彼は成仁の指揮下で戦場を駆けて敵と命がけて戦うことになる。カフジの戦いの時には一方的な勝利を得ることができたが、次もそうだとは限らない。彼ももしかしたら死ぬことになるかもしれない、成仁の命令に従うことで。

そこまで考えたとき、成仁は戦争に参加できるように直談判に行

ったときに父から聞いた言葉を思い出した。“部下を死なせる覚悟”、それがこの若い兵士を前によく実感できたような気がした。  
「休暇はどうするんだ？」

成仁は空気を換えようと新たな話題をふった。

「そうですね。やる事ないですし、映画でも見に行こうと思います。中隊長殿は？」

「久々に家に電話でもかけようと思う。呼び止めてすまない。ありがとう」

それぞれの目的地に向けて再び歩みだした2人。成仁はふと立ち止まって振り向き、こちらに背中を向けている酒巻に声をかけた。

「悔いの無いように楽しんでおけよ」

しばし時間を置いて成仁は続けた。

「暫くは休み無しになるだろうからな」

旅団の駐屯地には国際電話の回線が引かれ、内地の家族と電話ができるようになっていた。しかし数千人の将兵に対して電話機の数はわずかで、自由時間にはいつも長蛇の列ができていて、電話も一回15分以内というのが暗黙の了解になっていた。当然ながら階級を問わずだ。

成仁もその列に並び、辛抱強く電話の前に達するのを待った。ようやく電話の前に立つことができると、受話器を手に取り、北海道の自宅の電話番号を押した。しばらくすると妻が電話に出た。

「そっちはもう夕方か。こっちは昼間だ。暑くてしかたがないよ」  
長いこと離れていたこともあり、話は膨らんでいく。あつという間に時間は過ぎていった。

「それでな……」

成仁が部隊の近況を伝えていると、背中を後ろから突かれた。振り返ると年配の下士官が手にはめた腕時計を突いていた。

「すまない。時間が来た。またかけるよ」

受話器を戻して電話機を離れると、後ろの下士官がすぐに電話に飛びついた。

その時、部屋の屋上に備えつけられたスピーカーから女性の声が流れていた。

<中隊長以上の全指揮官はただちに会議室に集まってください>

駐屯地内の会議室に将校達が集まった。誰もが緊張した面持ちだ。そこへ旅団の指揮官が入室してきた。彼も彼を待っていた将校達と同じように緊張しきっていたが、それをうまく隠していた。

「第2海兵師団司令部を通じて新たな作戦計画が伝達された」

旅団長は将校達の前に立つとそう切り出した。

「多国籍軍はクウエート奪還のための攻勢作戦を21日から24日までのいずれかの日に発動する」

攻勢作戦の発動は誰もが予想していたことだが、それでも多くの将校がその宣告に強い衝撃を受けていた。成仁も押し寄せる期待と不安に押しつぶされそうになっていた。発表した旅団長自身も緊張を隠せなくなっていた。

「作戦名は“デザート・セイバー砂漠の剣”だ」

#### 14・攻勢の前に（後書き）

次回よりいよいよデザート・セイバー作戦です。まあ、これはアメリカ陸軍の作戦名なので海兵隊に配属されたサムライ旅団がそれを通知されるってのもおかしいのですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2052q/>

---

世紀末の帝国外伝 砂漠の剣

2011年11月26日00時58分発行